
ウルトラマンキャッスイ

桂 ヒナギク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ウルトラマンキャッツイ

【Nコード】

N6346B

【作者名】

桂 ヒナギク

【あらすじ】

西暦20XX年。渋谷に隕石が落下。渋谷は一瞬で壊滅。瓦礫の山と化した。その直後から、隕石の影響で平和だったこの星に再び怪獣が現れる様になったのだ。

++プロローグ++ (前書き)

巨大ヒーロー始めました。

女の子が主人公です。

レオに憧れています。

怒ると恐怖こわいです。

++プロローグ++

此処は太陽系第三惑星、地球。

今、この星に、巨大引責が落下しようとしている。

その隕石の後ろを、赤い巨人・レオが離れない様、ピッタリ張り付いていた。

(間に合わない!)

レオは諦めたのか、その場で止まった。

(仕方ない!)

するとレオは、眩い光線を隕石に放った。

ドカーンッ! 引責は粉々に破壊された。

が、しかし、破壊しきれなくて残ってしまった破片が、地球の引力に引つ張られ、大気圏を突入。破片は炎上しながら落ちて行った。

東京都渋谷区某所。

此処に、獅子山^{ししやま} 未来と言う一人の少女がいた。

彼女は都内の高校に通うごく普通の女子高生である。

その彼女が、青空を見上げていると、赤く燃え上がる隕石の破片が落下して来た。

「えっ、嘘・・・でしょ?」

と、未来が口にした瞬間、引責は地面に落下し、渋谷一帯を瓦礫の山に変えた。

未来はその影響で、瓦礫に埋もれてしまった。

(くっ、情けね。あたし、死ぬのね)

と、未来は苦笑し、気を失った。

その直後、地中深くより眠っていた巨大怪獣が姿を現した。

それが、全ての始まりである・・・。

++プロローグ++ (後書き)

設定・話し浮かんでるのにキャラクターデザインが浮かばん・・・。
頭の角をネコミミ風にして胸のカラータイマーの部分と、そこから
肩の所までのパーツ(?)はレオと同様の物にするか？

STORY 1・レオのピンチ、救世主登場

20XX年、渋谷に巨大隕石が落下し、渋谷は壊滅した。偶然にも、そこにいた少女・獅子山 未来は、瓦礫に埋もれ、気を失ってしまった。

その直後、壊滅した渋谷の地中から、巨大怪獣が出現。都内を襲撃し始めた。

人々は、地上を逃げ惑う。

一刻を争う事態と察したレオは、急いでそこへ向かった。

一方、壊滅した渋谷の瓦礫に埋もれた未来は、意識を取り戻していた。

「・・・・・・・・・・」
生きてる・・・・・・・・」

未来はそう呟くと、怪力で瓦礫の下から脱出した。

するとそこには、見渡す限り一面に瓦礫の海が広がっていた。

渋谷市民は皆、全滅しているであろう・・・・・・・・

「酷い・・・・・・・・」

辺りを見渡した未来はそう呟いた。

「これじゃあまるで、無き故郷の・・・・」

と、その時、遙か遠方から、

「ガオーッ！」

怪獣の鳴き声が聞こえて来た。

東の方からだった。

(何今の?)

と、今度は同じ方向から爆音が聞こえて来た。

それと共に、爆風が未来を襲った。

ピシッ！

鎌鼬現象かまいたちげんしやうが発生し、未来の右目の下辺りから血が滲み

出て来た。

「っ！」

未来はその血を指で擦り、一旦見つめるとペロリと舌で舐めた。決して美味しいとは言えない。

怪獣が暴れる都内。

レオはそこに、赤い炎をくぐって現れた。

地上を逃げ惑う人々は、立ち止まって、

「レオだ！」

「ウルトラマンレオだ！」

と、口々に叫び出した。

「でいやあっ！」

レオは空中で前転し、怪獣に攻撃した。

が、しかし、怪獣はそのでかい体を振り回し、太くて長い尻尾で、レオを弾き飛ばした。

不意を付かれたレオは、数メートルほど吹っ飛び、ビルにぶつかってそれを破壊した。

その頃未来は、レオが戦う現場に向かっていた。

途中、爆音と共に爆風が吹いたり、地響きがしたりと、未来の行く手を阻んだ。

（急がないと東京が、壊滅する！）

未来は東へ向かって走り出した。

一方レオは、怪獣にのし掛かられていた。

「こっ、このままじゃレオがやられちまうぞっ！？」

「何とかなんねえのかよっ！？」

と、地球人。

(こいつは強すぎる。今の俺には勝てないかもしれない……。もし俺が死んだら、誰が地球を護るっ!?)

と、その時、一発の光弾が怪獣目掛けて飛んできた。

その光弾は瞬間に怪獣にヒットし、そいつを吹き飛ばした。

(誰だ? 誰が放った?)

レオは素早く立ち上がると、辺りを見回した。

しかし、光弾を放った人物は何処にも見当たらない。

すると、声が聞こえて来た。

「こつちよ」

その声は、レオの足下から聞こえていた。

レオは下を向いた。

「情けないわね。それでもウルトラ戦士?」

レオの足下でそう言ったのは、隕石落下事故で生き残った未来だった。

レオは、未来が何者なのか、見当も付かない。ただ、地球人では無い事だけは、言動から理解出来た。

「ガオーッ!」

体勢を立て直した怪獣は、レオの不意を突いて襲って来た。

レオは慌てて振り向いたが、時既に遅し。怪獣は目と鼻の先まで来ていた。

ガシッ! 怪獣は両手でレオの首を掴み、きつく絞めた。

「ぐっ……」

首を絞められたレオは、呼吸困難に陥った。

「レオが殺されるっ!?!」

「もう地球はお終いなのかっ!?!」

と、騒ぐ地球人。

(このままじゃレオが殺される上に地球がメチャメチャになっちゃうー!)

「よし!」

と、覚悟を決めた未来は、両腕を胸の前で交差させると一気に斜め下へ広げ、こう叫んだ。

「キャツスイッ！」

すると、カトのキャストオフの如く、未来の全身にヒビが入り、それが勢い良く弾け飛んだ。そして、その内側から出て来た、獅子座L77星人の体をベースにヒツポリト星人の胴体、腕、足を合体させたボディを持った、レオ似の顔と微妙に短い角を生やした姿に、彼女は変形して巨大化した。

その名は、<Ultraman ウルトラマン Catsy>。L77星人とヒ

ツポリト星人の混血である。

「なっ、何だあれっ！？新しい怪獣かつ！？」

「ヒツポリト星人に似てるぞっ！？」

「でも胸にレオと同じのあるぜ？」

「って事はウルトラマンかつ！？」

と、模索する地球人。

(うっ、五月蠅い。でも気にしてたら集中出来ない。無視しよう)

「はああああっ！」

キャツスイは雄叫びをあげ、怪獣に襲い掛かった。

怪獣は慌ててキャツスイにレオを投げつけた。

しかしキャツスイは、サイドステップで避けながら怪獣に接近。

殴り飛ばした。

「この星を汚す者はっ、私が絶対に許さない！」

キャツスイはそう言って、怪獣に追い打ちを掛けた。

ドヒューーンッ！　キャツスイは怪獣を上空へ蹴り上げ、高速移動で先回りして上から叩き付けた。

ヒューーンッ！　怪獣は猛スピードで落下。地面にドカンッと音を立てて激突し、巨大なクレーターを作り上げた。

「きっ、貴様・・・ヒツポリト星人だろう？何故ウルトラ兄弟の味方をする？」

怪獣はそう言った。が、これはキャツスイのみに解る怪獣の言葉

である。他のウルトラ戦士や、地球人にはただの鳴き声にしか聞こえない。

「違うわ。L77星人の味方してるのよ。」

それと、二度と私の前で……『ウルトラ兄弟』と言う言葉を使いなあ！」

そう言っただけで、垂直に急降下をした。

「まっ、待て！」

お前、ウルトラ兄弟に怨みでも抱いてるのか？その口振りだとそう聞こえるぞ？」

その言葉にキャツスイは、慌てて減速し、怪獣を避けて地面に足を着けた。

「取り引きしようぜ？」

そう言っただけで怪獣は立ち上がった。

「と、取り引き？」

「ああ、そうだ。この星で二度と暴れないのを条件に、共にウルトラ兄弟を倒そうでは無いか。乗ってくれるだろ？」

「その条件は呑まないわ」

「な、何故？」

「だってあなたはこの星で暴れたもの。そんな奴とは取り引きなんかしたくは無いわ。」

自分の愚かさに反省して死ね！」

キャツスイはそう言っただけで、右掌で光弾を作り上げた。

「これはヒツポリトタールをL77星人の技術でエネルギー化した物。これを喰らった者は一瞬でブロンズ像に変わるわ」

キャツスイはそう言っただけで、野球のピッチングの様にそれを投げ飛ばした。

「止める！」

だが時既に遅し。放たれた光弾は怪獣に当たり、そいつを一瞬でブロンズ像に変えてしまった。

「てああ！」

キャツスイは地面を蹴って飛び上がり、空中で一回転して跳び蹴りを放った。

その技は、レオキツクの左足版・キャツスイキツクだった。

ドッカーンッ！ ブロンズ像は木っ端微塵に碎け散り、付近に爆風を引き起こした。

怪獣を粉砕したキャツスイは、再び地面を蹴り、去って行った。

それを追う様に、レオも飛び去って行った。

その後、地球ではキャツスイの事が取り上げられ、彼女は一夜にして有名になったと言う。

STORY 1・レオのピンチ、救世主登場（後書き）

女ウルトラマンと言えば、80のユリアン以来ですが、女子高生がウルトラマンなのは前代未聞です。

STORY 2・転校生は宇宙人

渋谷が壊滅し、住む場所と通う学校が無くなった未来は、引つ越
しと共に、都内の高校に転校をする事になった。

そして今、未来は転校先の都立高校の体育館の脇にいる。全校朝
礼会があるからだ。

「ではここで、皆さんの新しいお友達を紹介させて頂きます」
すると、壇上にゾロゾロと、転校生数人が登って一列に並んだ。

その中には、未来も含まれていた。

「此処に立っている彼等は、先日の隕石で壊滅した渋谷市民の生き
残り、その学校通っていた方達です。

では、自己紹介をして貰いましょう」

その言葉に、転校生達は順番に自己紹介をした。

沖田 貞義、真田 晃、新島 俊。

そして最後に、未来だ。

「渋谷から引つ越して来た獅子山 未来です。宜しくお願いします」
と、マイクの前で、頭を下げた。

すると、生徒達は騒ぎ始めた。

「そんな馬鹿なっ!？あんな大規模な隕石で生き残れる筈が無い!」

「宇宙人じゃねえの?」

「.....」

未来は沈黙した。

(何なの?この星の人間共は?)

「皆さんお静かに!」

獅子山さんが宇宙人な訳無いでしょっ!?

先生はマイク越しにそう怒鳴ると、未来に微笑んで見せた。

「先生、別に良いですわ。隠す事でも無いので」

「えっ、じゃあ?」

「その通り、私は地球人ではありません」

その言葉に、体育館は一斉に静まり返った。

「かつて、私の星は、何万光年と離れている場所に存在していました。しかし、ある日を境に、私の星は破壊されました。宇宙人の仕業です。私はその宇宙人の魔の手から逃れ、この星にやって来たのです。そんな私ですが、皆さん宜しくお願いします！」

「大変だな！どの星から来たんだ？」

その問いに未来は、ゆっくり口を開いた。

「ヒツポリト・・・星・・・です」

すると、館内はまた慌ただしくなった。

「侵略星^{ヒツポリト}人だどつ！？」

「この星から出て行け！」

「どうせそんな嘘吐いて地球を侵略するつもりなんだろうっ！？」

と、館内は殺伐とした雰囲気になり、しまいには物が飛んで来る始末。

プツンッ！ 未来の堪忍袋の緒が切れた。

未来は笑顔でこう言う。

「あら皆さん？ブロンズ像になりたくて？」

その問いに、館内は再び静まり返る。

「皆さん、私はこの星を征服しようなんて、一切考えておりません。私は、この星を護りたいのです。以前、私の故郷であるヒツポリト星は、宇宙人によって襲撃を喰らっています。私はそんな事、絶対に許されない事だと思っています。だから、私はこの星をつ、第2の故郷をつ、皆の命をつ、怪獣、侵略宇宙人から、命掛けで護り抜きたいと、心から思っています！」

すると生徒達は、未来の演説に感動したのか、大きな歓声を沸き起こした。

だがそれも束の間の出来事。突然大きな地震が発生し、館内の生徒、教師達を襲ったのだ。

「皆落ち着いて！ただの・・・地震だから・・・」
だが、惜しくもそれは、怪獣出現の二次災害に変わってしまった。

バキッ！ 体育館の天井が剥がされ、館内は眩しい太陽の光りに照らされた。

「ガオーッ！」

と、怪獣の鳴き声。

「見ろっ、怪獣だ！」

「皆逃げるんだ！」

「この距離じゃ無理だ！」

生徒達は館内を走り回った。

やがて、その内の一人が、未来にこう言った。

「お前さつき地球とその生命を命掛けて護るって言ったよな！？ だったら今此処で、俺達を護ってくれ！」

その言葉に、未来は喜びを感じ、思わず涙と笑みを溢した。

（皆が私を信用してくれている。絶対に護らなくちゃ）

すると未来は気合いを入れ、

「キャッスイッ！」

と、叫んで変身、巨大化した。

「あっ、あれはこの間の新しいウルトラマンじゃねえかっ!？」

「ヒッポリト星にもウルトラマンがいたのかっ!？」

生徒達はそう騒ぐが、今のキャッスイにはそんな事どうでも良かった。

「さあて怪獣さん？私相手よ？」

キャッスイはそう言っつて、生徒達を踏まない様気を付けながら、怪獣に襲い掛かった。

「やっ！」

と、怪獣を蹴り飛ばし、体育館から遠ざけるキャッスイ。

ドンッ、ドンッ、ドンッ！ キャッスイは構えながら地面を鳴ら

し、横へゆっくり動いた。

相手の出方を窺うかがっているのだ。

両者は互いに見詰め合うと、怪獣が先に動き出した。

（はっ、迅いっ!?!）

キャツスイは不意を突かれ、最初の一撃を喰らって倒れてしまった。

その上に、怪獣がのし掛かった。

怪獣は、下敷になったキャツスイの顔面を、目にも留まらぬ速さでボコボコと殴り始めた。

(くっ、攻撃が見えないっ!?)

「ふわははははっ、ウルトラ戦士の癖にそんなに弱いのか? そんなんじゃ人間達を護れ無いな」

怪獣はそう言っつて、掌を顔面に叩き付け、強く掴んだ。

「オレはな、相手が女だからって手は抜かないぜ。オレの邪魔をする奴は皆殺しだ」

ガシッ! キャツスイは怪獣腕を掴んで持ち上げた。

「やっとお前の攻撃に慣れて来たわ。此処からが本番よっ!?!」

そう言っつて、怪獣を蹴り上げるキャツスイ。

だが、怪獣は重すぎて直ぐに落ちて来た。

「うっ!」

キャツスイの全身に激痛が走った。

「クククク、オレはスピードと体重が武器なんだぜ。思い知ったかっ!?!」

ピコーン、ピコーン、ピコーン　キャツスイのカラータイマーが赤く点滅を開始。キャツスイは地球上では、2分45秒しかいられないのだ。

立てキャツスイ! 皆が応援してくれているぞ!

「獅子山さん、ガンバレーッ!」

生徒達はキャツスイを応援した。

キャツスイは、皆の希望を壊すまいと、渾身の力を振り絞って怪獣を持ち上げ、立ち上がった。

「なっ、何てパワーだっ!?!これほどまでとは!」

「体重とスピードだけじゃ、どうやっても超えられない壁があるっつて事を、お前に教えてあげるわ。じっくり頭に叩き込んで死ぬのね」

そう言ってキャツスイは、怪獣の腹を拳で殴り、反対側へ貫いた。
グサツ！ 怪獣の腹に風穴が開く。

「終りよっ！」

キャツスイは貫通した拳を、勢い良く引っこ抜いた。

「うぐっ！」

怪獣は蹠^{よろ}踵^ろめき、後ろへ後退。

「くっ、ウルトラ戦士如きが・・・」

と、怪獣は爆裂霧散。最後にこう言い残した。

「ジユダ様！」

(ジユ、ジユダ様って！？まさか今のっ、ジユダ様がつ！？)

キャツスイは地面に膝を着き、小さくなると、未来の姿に戻った。

「私は・・・取り返しの付かない事をしてしまったのかもしれない・

・・・」

STORY 2・転校生は宇宙人(後書き)

変身バンクが「仮面ライダー」。

これは何と無くですね。

にしても、ジユダ様って……。

しよっぱなからやばい展開になりそうです。

STORY 3・グローザム復活！キャットスイVSグローザム

時は遡り2007年。

四天王の一人、不死身のグローザムは、一人の英雄・メビウスとその仲間、Crew guysの手によって倒された。

が、しかし、彼は生きていた。

そして、時を超え、今、再びこの星に現れた。

「此処は・・・何処だ？」

そう口にしたのは、隕石落下直後の壊滅した渋谷に、一人佇む宇宙人、グローザムだ。

「地球・・・なのか？」

グローザムは、訳も分からず辺りを見渡すが、辺り一面は瓦礫の海である。

そのグローザムの下に、未来が現れてこう言った。

「今から一ヶ月前。此処、渋谷に隕石が落下し、渋谷全体を瓦礫の海に変えた」

その声に、グローザムは振り向いた。

「誰だ？」

その問いに未来はグローザムを睨み付けた。

「はあ？お前何様？普通、人に名を聞く時は自分から名乗るもんでしょ？」

まあ、見た目からしてアンタが冷凍星人だと言う事は見当付くけどね」

「お、俺はグローザムだ」

（何だこの餓鬼は？女の癖に生意気すぎるぞ？）

「餓鬼？これは地球で暮らす為の借りの姿よ」

グローザムの心を読んだ未来はそう言った。

(なっ、こいつ他人の心が読めるのかっ!?)

「悪い?」

「否、全然?」

「あっそう。」

私は獅子山 未来。ヒツポリト星人よ。

それはそうと、グローザムだっけ?あなたはこんな所へ何しに来たの?」

その問いに、グローザムは俯いて暗くなった。

「分からない・・・分からないんだ。メビウスにやられ、気が付いたら此処にいた」

「メビウス、って?」

未来は首を傾げた。

「怪獣、宇宙人から地球を護らんとするウルトラ兄弟の一人だ」

「待って?そんな奴私知らないよ!だって、今この星を護ってるのは、私一人だけだもん!」

「どう言う事だ?」

「知らないわよそんなの!」

「なあ、今西暦何年だ?」

「20XX年よ」

その言葉に、グローザムは驚愕した。それもその筈。自分のいた時代から何十年も経っていたからだ。

「俺は・・・何十年も先の未来に飛ばされてしまったのか。」

メビウスの奴目。こうなったら見つけ出して捻り潰してやる!」

グローザムはそう言って、町の方へと向かって行った。

町に着いたグローザムは、巨大化して町を襲撃。

「ウルトラマンメビウスよ!この星にいる事は分かっている!大人しく出て来い!さもないと地球を破壊するぞ!」

その威勢に、人々は避難を始めた。

「怪獣だっ、みんな逃げろ！」

と、怪獣から遠ざかる男の横を、一人の青年が擦れ違った。

「あいつはグローザム！生きていたのかっ!?!？」

青年はグローザムを鋭い目つきで睨み付けると、

「メビウス！」

と、叫んでそれに変身。グローザムの前に現れた。

「グローザムッ、生きていたのかっ!?!？」

「現れたなメビウス。今度こそ貴様を捻り潰してやる！」

そう行つて、グローザムは先制した。

「待てグローザム！」

「誰が待つものかっ!?!？」

「違っ!！」

と、メビウスは横へ転がって攻撃をかわした。

「此処ではまずい！場所を変えよう!?!？」

「ふっ、良いだろう。選ぶ権利はお前にやる」

渋谷跡地。メビウスとグローザムはそこにやって来た。

「此処でなら地球人に迷惑は掛からない。やるなら此処でやるっ」

「良いだろう。此処が貴様の墓場だ!！」

すると両者は、お互いに激突をした。

その様子を凝視する未来の脳裏に、ヒッポリト星での記憶が蘇つた。

(アイツ、前に見た事がある……。あれは数年前、ヒッポリト星が襲撃された時だ!！)

「わああああ!！」

未来は雄叫びをあげ、メビウスの下に走り出した。

「キャッスイ!！」

未来はそう叫び、それに変身。巨大化してメビウスに襲い掛かった。

「やあっ！」

メビウスにキャツスイの飛び蹴りが炸裂。メビウスを吹っ飛ばした。

「グローザム、加勢するわ」

「お前は先程のヒツポリト星の女か。」

ふんっ、メビウスは俺の獲物だ。邪魔をするな！」

ブンッ！ グローザムの拳がキャツスイに直撃。

キャツスイは吹っ飛び、地面に背中を打ち付けた。

「痛っ！」

キャツスイはゆっくり起き上がると、

「何すんのよっ！？痛いじゃない！」

と、グローザムに跳び蹴りを放った。

技を喰らったグローザムは吹っ飛び、地面に激突。

「さてトドメよ」

「待て、君たちは仲間じゃないのか？」

そう問うのはメビウス。

キャツスイはそのメビウスに、

「はあ？仲間じゃないわ。て言うか私を殴った時点で敵よ。」

それとメビウス・・・」

と、キャツスイはメビウスに襲い掛かった。

メビウスは咄嗟の判断で攻撃を避けた。

「なかなか良い動きをしてるじゃない？でも、今度はそうはいかないよ」

そう言ってキャツスイは、メビウスに突進した。

「待てっ、メビウスは俺の獲物だと言ったろっ！？」

と、キャツスイを蹴り退かすグローザム。

「邪魔よアンタ！」

キャツスイはグローザムを蹴り返した。

「メビウス、一時休戦よ。アンタを倒すのは私だから」

そう言って、キャツスイはグローザムに襲い掛かった。

「はあっ！」

と、グローザムを殴り飛ばすキヤツスイ。

グローザムは体勢を立て直し、キヤツスイに反撃をした。

「俺の邪魔をすると言うのなら、お前から倒してやる」

「それはこっちの台詞！」

と、両者の拳と拳がぶつかり合う。

「グローザム、あなたって強いよね」

「お前こそな」

と、その時、キヤツスイのカラータイマーが点滅を始めた。

(ちっ、もう2分45秒?)

そう心の中で言うキヤツスイに、グローザムは訊ねた。

「お前、ウルトラ戦士か？」

「あら、今頃気付いたの？」

私はL77星人とヒツポリト星人の混血よ」

「成る程。だからAをブロンズ像にした奴に似ているのか」

「そんな事より時間が無い。一気に片を付けさせて貰うわ！」

キヤツスイはそう言うと、一旦後方へ飛び退き、地面を蹴って飛び上がった。

「いやあっ！」

と、空中で回転してキヤツスイキックを放った。

ドカーンッ！　グローザムは木っ端微塵。

しかし、彼は直ぐに再生した。

「無駄だ。俺は無敵だ」

「へえ、面白い能力ね。私も欲しくなったわ」

「そうだろう？だが、これは俺しか使えない特殊能力だ」

「そう。なら私の特殊能力も見せてあげるわ」

そう言ってキヤツスイは、グローザムに飛び掛かった。

「その体、私が貰うわ！」

「何っ!？」

キヤツスイはグローザムに抱きつき、体を発光させた。

すると、グローザムの体が共鳴し、発光を始めた。

「なっ、何だっ！？体が、吸い込まれるっ！？」

「これが私の能力、吸収よ！」

相手の体を取り込んで、体と能力を自分の一部にする。あんたの体は貰ったわ」

「やっ、やめる！」

だが時既に遅し。グローザムはキャツスイに完全に取り込まれてしまった。

「はっ！」

と、キャツスイは腕を胸の前で交差させ、斜め下へ一気に広げた。すると光りが消え、中からヒツポリト星人のそれでは無く、グローザムの胴、腕、足が付いたキャツスイが現れた。

ウルトラマンキャツスイ・グロザムフォームである。

（あっ、グローザムと合体したっ！？）

そう戸惑うメビウスに、

「私は疲れたから帰る。あなたとの勝負はお預けよ」

キャツスイはそう言い残し、地面を蹴って飛び去って行った。

STORY 4 ・高次元捕食怪獣・ボガール現る（前書き）

今回はちょっと長め。

STORY 4・高次元捕食怪獣・ボガール現る

最近、キャツスイの活躍で、怪獣の出現が治まりつつあった。

それは、人々にとつて、とても喜ばしい事であった。

しかし、未来の通う高校に、一人だけ面白くない顔をした、高山^た誠司^{かやま}と言う人物がいた。

「ウルトラマンキャツスイ。今に見ている？」

その日、未来の高校に彼女宛の怪しい手紙が届いた。

登校した未来は、友人の佐久間^{さくま} 優香にその事を聞かされた。

「私宛の手紙？」

「うん。だけど、意味不明なものばかりで、何て書いてあるのか分からないの」

「な、中身読んだのね。」

それで？その手紙は今何処に？」

あそこ と、窓際の未来の席を指差す優香。

その指の先を見ると、確かに未来の席、正確には机の上に置いてあった。

未来は、何だろう？と、席に着いて手紙を開いて見た。

『お前がウルトラマンキャツスイだと言う事は分かっている。単刀直入に言う。俺と戦え。』

放課後、渋谷廃墟に來られたし！』

手紙には、宇宙語でそう表記されていた。

差出人は不明だった。

未来はその手紙を、スカートのポケットにしまった。

すると、優香が訊ねた。

「手紙、何だったの？」

「解らない。多分ただの悪戯だと思っ」

と、その時、クラスメイトの高山 誠司が現れ、未来のスカート
のポケットから手紙を抜き取った。

「あっ！」

誠司は、その手紙を開き、読みあげた。

「『お前がウルトラマンキャッスイだと言う事は分かっている。単
刀直入に言う。俺と戦え。』」

放課後、渋谷廃墟に來られたし！』だってよ！」

未来は驚いた。

「せつ、誠司君宇宙語解るのっ!?!」

すると、教室中は一斉に慌ただしくなった。

「皆聞いたかつ!?!獅子山に果たし状だってよ！」

未来はその騒がしい教室の窓際で、引き攣り笑いをした。

放課後、未来は渋谷廃墟にやって來た。

何故かクラスメイト全員が付いて來ている。

未来はそのクラスメイト達に訊ねた。

「面白そうだからに決まってんじゃない」

「そうよそうよ」

「それに、どっちが勝つのかも気になるしね」

と、その時、未来に謎の声が問い掛けて來た。

「獅子山 未来よ。キャッスイとなって俺と戦え！」

その言葉に未来はこう叫んだ。

「お前は誰だっ!?!」

すると、巨大怪獣・ボガールが姿を現した。別名、高次元捕食体。

このボガールは、以前メビウスが倒したボガールの別個体である。

「俺の名はボガール。キャッスイ、俺と戦え！」

(んっ、この声って誠司君?)

と、未来はキャッスイに変身して巨大化した。

「あなた、もしかして誠司君？」

「もしかしなくてもその通りだ」

「誠司君・・・否、ボガール。一体何を企んでるの？」

「ふっ、最近のお前は調子に乗りすぎだ。だから俺がお前を倒してその頭に叩き込んでやるよ。ウルトラマンでも勝てない相手がこの世にはいるって事をな。そして人間共からお前への信頼を断ち切つてやる」

そう言つてボガールは、キャツスイに襲い掛かった。

身構え損なつたキャツスイは、慌てて横へ転がり避け、地面に膝を着いた。

「何故避ける？」

「ボガール、私はあなたとは戦えない」

「そうか。ならば嫌でも戦わざるを得ない状況にしてやろう」

ボガールはそう言つて、クラスメイト達の方を振り向いた。

「キャツスイ、戦わないならこいつらを踏み潰して殺す。それでも良いのか？」

「くっ・・・・・・・・」

キャツスイは言葉に詰まる。

「3秒だけ時間やろう」

ボガールはそう言つて、数を数え始めた。

「1、2、3。時間だ、答えて貰おう。こいつらを護りながら俺と戦うか、それともこのまま見殺しにするか、どちらを選ぶ？」

「戦える訳・・・・・・・・無いよ・・・・・・・・」

「ほう。こいつらを見殺しにするのか。それも良からう」

ボガールはそう言つと、クラスメイト達の方へ歩き出した。

「やめてボガール！」

「そいつは出来ない。これはお前が望んだ事。今更後には引けないぜ」

そう言いながら、ボガールはクラスメイトの一人を踏み潰そうとした。

「皆逃げて！」

キャツスイはそう言うが、宇宙語など当然地球人には理解出来なかった。

「無駄だ。人間に宇宙語が通じる筈が無い」

ボガールがそう口にする、キャツスイはヒッポリトール光弾をそいつの足に向かって放った。

光弾が当たったボガールの足は、一瞬でブロンズ像に変わり、動かなくなった。

「何っ!？」

だがまだ片足がある」

すると、再び光弾が当たり、もう片方の足もブロンズ像に変わった。

「やめろって言うてんのが解んねえのかよっ!？」

「貴様・・・」

と、ボガールは振り向いた。

それと同時にキャツスイは立ち上がり、ボガールに接近。蹴り飛ばしてクラスメイトから遠ざけた。

「貴様・・・良くもやりやがったなあ!」

ボガールはそう言う、第二形態・ボガールモンスに変身した。パキンッ! ブロンズ像が割れ、足が自由になる。

「俺がこの姿になるのは、相手が俺より上の場合だけだ。俺をこの姿にさせた事を、後悔するが良い!」

ボガールモンスはそう言う、目にも留まらぬ速度でキャツスイに襲い掛かった。

(くっ、速すぎて見え)

「ふわっ!」

キャツスイは突然空中へ舞い上がった。

ドヒュインッ! その音と共に、彼女は急速に落下。背中を地面に打ち付けた。

ドスンッ! ボガールモンスがキャツスイの上に乗し掛かった。「ぐっ!」

キヤッスイは痛みに耐えかね、呻き声を漏らした。

「どうしたキヤッスイッ!? 動きが鈍くなつたんじゃねえかつ!?」

「お・・・お前が速すぎ・・・なんだ・・・」

その言葉と共に、キヤッスイのカラータイマーが鳴り、点滅を始めた。

「あつ、未来さんがつ!?」

と、優香。

続けて男子達が、

「頑張れ獅子山!」

「お前がそこで殺られたら俺達はどうなるんだよっ!?」

「立てよ獅子山!」

と、次第に応援を始める。

(皆・・・)

キヤッスイは、渾身の力を振り絞り、ボガールモンスを持ち上げる。

「くっ、何だこの力はっ!?」

「知ってるでしょ? ヒツポリト星人は全宇宙最強なのよ」

「だが所詮、自称は自称だ!」

グサッ! キヤッスイの腹をボガールモンスの爪が貫通し、彼女

の腹から光りの粉が飛び散った。

直後、ボガールモンスは爪を引っこ抜いた。

グシャッ! と、光りの粉が一気に飛び出る。

「私の・・・負け・・・ね・・・」

キヤッスイはそう呟くと、爆発して跡形も無く消え去った。

その光景に、皆は驚いた。

「獅子山さんが、殺られた・・・」

「未来さん・・・」

「お、俺達の・・・希望が・・・」

と、その時、ボガールモンスの背後に、グロザムフォームのキヤッスイが現れた。

「残念だったわね。私は不死身よ」

「何っ!？」

と、慌てて振り向くボガールモンズ。

「この能力がある事、すっかり忘れていてさっきは焦ったわよ。」

でも、爆発の寸前で思い出せて良かったわ」

「成る程。爆発の寸前にその姿になった、と言う訳だな？悪運の強い奴目」

「言っておくけど、今度は殺られないわ」

「ふっ、俺に付いて来れ無かった癖に良く言っぜ」

「じゃあ試して見る？」

「面白い。挑む所だ！」

その瞬間、皆の視界から二人の姿が消え、それが数秒程続くと、両者は再び姿を現した。

「なかなかやるわね」

「お前もな」

と、両者はお互い駆け出し、激突した。

「それよりお前のその姿、冷凍星人じゃないのか？」

「そうよ。私には生き物を吸収し、姿と能力を真似る事が出来るのよ」

「成る程。」

吸収された者はどうなる？」

「魂ごと私の一部になるわ。つまり、吸収した相手の意識が強ければ、私はそいつに支配される可能性があるって事ね」

「って事はお前を気絶させればその体内の冷凍星人にもお前を支配する事が出来るって訳だ？」

「そうだけど……。。って、アンタまさかっ!？」

「そのまさかだ！」

と、ボガールモンズは横へひよいと避けた。

「わっ!？」

キャツスイは前に吹っ飛び、腹這いに倒れた。

「痛っ！」

と、キャツスイが起き上がるうとした時、ボガールモンスが乗し掛かった。

「うっ……」

キャツスイは気絶してしまった。

「おい、退けよ？」

そう口から発せられたのは、キャツスイの声では無く、グローザムのそれだった。

「お前、冷凍星人の方か？」

「そうだ。って、どうでも良いから早く降りろ！」

その言葉に、ボガールモンスは退く。

「冷凍星人、名は？」

「グローザムだ」

「体は自由か？」

「勿論だ」

と、キャツスイは起き上がった。

「ボガールとか言ったか？」

「ありがとな。お前のお陰で、自由になれたぜ！」

ズシンツ！　キャツスイの肘パンチがボガールモンスの腹に決まった。

「ぐっ……貴様、どう言うつもりだ？」

「俺はな、こいつに自由を奪われてムシャクシャしていたんだ。悪いが貴様には消えて貰う」

キャツスイはそう言い放つと、肘を戻して回し蹴りを放った。

ズガンツ　回し蹴りが決まり、ボガールモンスは地面を転がった。

「これでトドメだ！」

と、光線を撃つポーズをした。

が、しかし、光線は出なかった。

「勝手に私の体使ってんじゃねえよ」

そう頭の中で声がすると、キャツスイは体の自由が効かなくなっ

た。

(ふう、ボガールのせいだとんだ目に遭ったわ)

そう頭の中で言うと、キャツスイはボガールモンスの下に移動。奴の上に跨って光弾を放つ体制に入った。

「くっ、俺の負けか……。ささつと俺を殺せ」

その言葉にキャツスイは首を横に振った。

「そんな事出来ないよ。だってボガールは、友達だもん！」

その言葉に、ボガールモンスの心が揺れ動いた。

「キャツスイ、お前……」

「キャツスイは首を縦に振った。」

「そうか。こんな俺でも、友達だと思ってくれるのか……」

「キャツスイは再び首を縦に振った。」

「キャツスイ、すまない。俺が、俺が悪かった。許してくれ」

そう言うと、ボガールモンスは、段々と消えた。

キャツスイは肩を落とすと、小さくなって未来の姿に戻った。すると、未来の周囲に皆が集まって来た。

「未来さん勝てたのね？」

と、目を丸くする優香。

「うん！」

未来は笑顔で頷いた。

STORY 4 ・高次元捕食怪獣・ボガール現る（後書き）

何かウルトラマンはピンチに陥った方が良いらしいので、こんな感じにしてみました。

STORY 5 憑依怪獣テレサリアン(前書き)

今回は憑依系。
しかも長いし。

STORY 5・憑依怪獣テレサリアン

今から一週間程前、地球に弱くて話しにならない宇宙怪獣がやって来た。

未来は最初、戦う気は全く無かったが、地球人があまりにも騒ぐので、キャツスイに変身して片付ける事にした。

そして、一撃で粉碎した。

事は一旦、それで収まったかと思われた。

しかし、その怪獣が、もつとも厄介な状態で蘇るとは、この時はまだ、誰も知る由しも無かった。

その日の夜、学校に忘れ物を取りに来た優香は、一階の窓から校舎に忍び込んだ。

すると、彼女の横をスツと白いモノが通り過ぎた。

「何っ!?!」

と、慌てて振り向く優香。

しかし、そこには誰もいなかった。

何だろう?　彼女はそんな顔で、一階の自分の教室へ向かった。

教室に着くと、優香は自分の席まで行き、机の中に手を入れた。

あった!　彼女は机の中から、数学のノートを取り出した。

これが無いと、明日の授業で大恥を掻く事になるのだ。

「あ、もうこんな時間」

何気無く時計を見た彼女は、早く帰ろうと、教室の出入り口に差し掛かった。

すると、何者かの低い声が聞こえて来た。

「お前の体を私に貸してはくれないか?」

その問いに彼女は顔色を変えてノートを落とす。

「だ・・・誰？」

「私の名はテレサリアン。私は今、悪い宇宙人に追われていてね。何処かに身を隠そうと思ったたら君を見付けて声を掛けて見たんだが・・・」

「悪い宇宙人？」

「そう。だから一先ず安全な所に身を隠したいのだ。だから、君の体を少しの間貸してはくれないか？」

「良いけど、未来・・・ううん。キャツスイに相談しないと・・・」
「そんな暇は無い！」

その気迫に優香は驚いた。

「わ、分かったわ。で、でも、本当に少しの間だからね？ほとぼりが冷めたら返してよ？」

「うむ。約束しよう」

テレサリアンはそう言うと、優香の前で実体化し、彼女に入り込んだ。

「はっ！」

苦痛を感じた優香は、呻き声をあげると気を失った。

そして、テレサリアンは彼女の体を支配した。

(馬鹿な人間目。お前の体は一生俺の物だ)

テレサリアンはそう頭の中で言うと、ニヤリと口元を緩めた。

翌日、テレサリアン優香は学校に登校した。

すると、昇降口で未来と鉢合わせしてしまった。

「おはよう、優香さん」

と、ニツコリ笑顔で声を掛ける未来。

(こいつは、俺を殺した女だな)

と、未来を睨み付けるテレサリアン優香。

「優香さん、そんな怖い顔して、何かあったの？」

そう聞かれ、テレサリアン優香は慌てて微笑んだ。

「そ、そんな事無いわ、よ？それにしても良い天気よね？」

「え、今日は、雨だけど？」

「ザァー」と、雨音が聞こえる。

「そ、そうだったわね。あ、いけない。授業に遅れちゃう」

テレサリアン優香はそう言って教室へ向かった。

未来はその彼女の背中を凝視した。

(今日の優香さん、何か変。少し探りを入れようかしら)

と、未来は目を瞑って瞑想した。

すると、未来の横にグローザムの幻体が現れた。

「グローザム、彼女を探って頂戴」

「お任せ下さい」

グローザムはそう言うと、優香の後を追って教室に入って行った。

放課後、未来は帰ろうとしているテレサリアン優香を呼び止めた。

「あら、何かしら？」

「優香さんを返してくれないかしら？」

「な、何の話しかなあ？」

テレサリアン優香は冷や汗を掻いた。

「お前が優香さんじゃねえって事はとっくに調べが付いてんだ。正体を現したらどうだ？」

「な、何言ってるのよ？私は優香よ？佐久間 優香よ？」

「グローザム、彼女にあれを見せてあげなさい」

すると、グローザムの幻体がテレサリアン優香の前に現れ、彼女の頭に手を突き刺した。

その瞬間、テレサリアン優香の脳裏に、優香の昨日の記憶が流れ込んで来た。

「なっ、何よこのイメージっ！？」

「それは昨日の優香さんの記憶。つまり、あんたがその体に憑衣し

た時の記憶ね」

「こっつ、こんなのデタラメよ！」

テレサリアン優香はそう言つと、雨の降る校舎の外へ飛び出した。
「待ちなさいっ、テレサ星人！」

その言葉にテレサリアン優香は立ち止まり、未来の方を振り向いた。

「ふっ、バれてしまつては仕方ない」

テレサリアン優香はそう言つと、巨大怪獣・テレサリアンに変身した。

「やっぱりお前か！」

と、未来は校舎から出る。

「ウルトラマンキヤツスイ、良くも俺を殺してくれたな」

「殺した？ふっ、あんなの殺した内に入らないわ」

「黙れ！」

テレサリアンはそう言つて、未来にパンチを繰り出した。

ドカーンッ！ 未来はギリギリ、間一髪の所で横に飛び避けた。

「くっ、チビの癖にちよこまかと！」

「この方が動き易いのよ」

未来はそう言つて、光弾を放つた。

「そんなもの痛くも痒くも無いね」

「な、何で？この間は効いたのに」

「未来様、それは奴が優香殿に乗り移っているからです」

そう言つて未来の横に現れたのが、グローザムの幻体である事は、最早言つまでもない。

「どう言う事？」

「奴、テレサ星人は、普段は弱いけど、他人に乗り移ると、とんでもなく強くなるんです」

「一体どれだけ強くなるのよ？」

「それは乗り移られる者によります」

グローザムはそう言い残し、未来の体内に入り込んだ。

「ふっ！」

未来は飛んで来た拳を力一杯抑えた。

「ほお、その小さい体で止められるとは、流石ウルトラマン」

（抑え切れないっ!?!）

未来は慌ててキャツスイに変身。巨大化した。

「許さない・・・」

と、キャツスイは呟く。

「何だつて？」

「許さねえって言ってるんだよ！」

怒ったキャツスイは、テレサリアンをぶん殴った。

しかし、テレサリアンは攻撃を受け付けず、通り抜けてしまった。

「無駄だ。俺は霊だからな」

「くっ・・・」

言葉に詰まるキャツスイ。

「だが、こつちからは攻撃出来るぞ」

ブンッ！　テレサリアンはキャツスイの腹を殴った。

「ぐっ！」

と、腹を押さえるキャツスイ。

（どうして？何故向こうに出来て私に出来ないの？そんなバカな事

つてっ!?!）

「どうした？動きが止まってるぞ？」

テレサリアンはそう言っつて、回し蹴りを放った。

ズガンッ！　キャツスイの顔面に足がヒット。

キャツスイは数メートル程飛ばされ、地面を転がった。

（どうすれば良いんだ？奴に攻撃を当てる方法は・・・。一か八か

懸けて見るか）

そう思ったキャツスイは、起き上がってテレサリアンに接近した。

「無駄だと言ってるだろう！」

テレサリアンはキャツスイを殴る。

シューインッ！　その瞬間、キャツスイの姿が消え、テレサリアン

の頭上に出現した。

(頼む、当たって！)

そう思いながら、キャツスイはテレサリアンを思いっ切り蹴り飛ばした。

バシーンッ！　テレサリアンは吹っ飛んだ。

(手応えあった！)

「ばっ、バカなっ！？」

何故この俺がっ！？」

「テレサリアン、あんたを攻撃する方法が分かったわ。

あんたが私を攻撃する瞬間、あんたは霊子を分子に切り替えて攻撃する。その瞬間を狙えば、あんたに攻撃が出来るわ」

「だったら俺が攻撃しなければ良い」

「そう……。じゃあ、嫌でも私を攻撃をしなければならぬ状況にしてあげるわ」

キャツスイはそう言うと、グローザムの幻体を出現させた。

「あんたが攻撃しないんなら、私の可愛いシモベにやって貰おうかしら？」

グローザム、やるのよ」

「はい、キャツスイ様！」

そう言っつてグローザムは、テレサリアンに襲い掛かった。

バシーンッ！　テレサリアンを殴り飛ばすグローザム。

テレサリアンは地面を転がると、素早く立ち上がった。

「くっ、何故そんな奴に攻撃が出来るんだっ！？」

「同じ霊子だからに決まってるじゃない」

「こうなったら、貴様を始末してやる！」

テレサリアンはそう言っつて、キャツスイに襲い掛かった。

「戻ってグローザム！」

「承知！」

グローザムはキャツスイと重なった。

ブンッ！　テレサリアンの拳が飛んで来た。

キャツスイは寸前の所で、目にも留まらぬ速度でかわして背後に回り込み、回し蹴りを放った。

バシーンッ！ テレサリアンは再び吹っ飛んだ。

「くっ、一度ならず二度まで俺を吹っ飛ばすとは！」

と、立ち上がった襲い掛かるテレサリアン。

「こうなったら貴様に移ってやる！」

そう言っただけでテレサリアンは、巨大な体から抜け出した。

すると、怪獣の体はみるみる内に小さくなって行き、元の優香の姿に戻った。

だが、キャツスイはそんな事は気にせず、テレサリアン本体を見つめていた。

その本体が、徐々に近付いて来る。

(今だ！)

キャツスイは全身を黄色く発光させた。

それと同時にテレサリアンの体も共鳴。黄色く発光した。

「ふははははっ、バカ目！それではまるで『体をあげます』と言える様なもんじゃないか！」

スッ！ テレサリアンはキャツスイに入り込んだ。

キャツスイは光りを消失させると、掌を見つめながら、それを動かして見た。

(クククク、簡単に手に入ってしまったでは無いか)

と、その時、キャツスイの体が半透明になった。

「なっ、何が起きてるっ!?!」

「私とあんたが同化を始めたのよ」

「きっ、貴様、喋れるのかっ!?!」

「ウルトラマンキャツスイッ、始動！」

すると、テレサリアンのキャツスイコントロール権が断ち切られ、テレサリアンの意識が薄れ始めて行った。

「良い事教えてあげるわ。私にはね、敵を体内に取り込んで吸収する能力があるのよ。」

あんた何か、簡単に私の一部に出来るんだから」

「よっ、よせ！それだけはよせ！俺には家族がいるんだ！帰らなくてはならん！見逃してくれ！」

「嫌よ。あんたの能力貰うんだから」

「うわあああああああつ！」

テレサリアンは悲鳴をあげると、意識を失った。

キヤツスイは小さくなり、未来の姿に戻った。

「優香さん！」

未来は優香の元に駆け寄る。

(すっかり衰弱しきつてる！早く保健室に運ばないと！)

未来は優香を持ち上げようとしますが、重くて一人では持ち上げられなかった。

未来は仕方なしに、たった今手に入れた能力で半透明になり、優香の体に重なった。

ピクツ！ 優香の肉体が痙攣を起こすと、頭、腕、足、全ての器官が未来に支配出来る様になった。

優香は起き上がると、保健室に向かった。

優香が保健室に入ると、美人の先生がニッコリ笑顔で声を掛けた。
「どうしました？」

その問いに優香は、

「あ、あの、ちよつと気分悪くて……。横になっても良いですか？」

「あら大変。先にお熱を計りましたよ」

先生はそう言うと、傍にあつた体温計を取り上げた。

「これを脇の下にしっかり挟んでね」

と、優香に体温計を渡した。

優香はそれを受け取ると、脇の下にしっかり挟んだ。

数分後、体温計がピーと音を出した。

優香は体温計を取り、画面に表示された温度を見た。
体温は39度近くあった。

それを見た先生は、

「あらま、凄い熱」

と、優香の額に触る。

「かなり熱いわね。これは早く帰って寝た方が良いわ」

(そんな事言われても、私優香さんの家知らないしなあ・・・)

と、その時、突然頭の中で声がした。

「私の家、未来さん家の・・・隣・・・だから・・・」

(えっ、私ん家の隣?)

「じゃあ私帰ります」

と、優香は先生に挨拶すると、教室に戻り、未来の鞆と自分の鞆を持って獅子山家の隣の家へ向かった。

STORY 5・憑依怪獣テレサリアン（後書き）

RPG風に行くと・・・。

キヤツスイは3レベルにあがった。

テレサリアンの能力を手に入れた。

他人に憑依出来る様になった。

透明人間になれる様になった。

5ウラー（ウルトラマン達が使うお金の単位）手に入れた。

STORY 6・優香、怪獣になる(前書き)

携帯読者へ

機種によりますが、全部で三ページあります。長いです。

STORY 6・優香、怪獣になる

その日、優香は自分の服を買いに、デパートに来ていた。どれにしようか？ と、色々見たり試着をしたりしている。

その優香の付き添いで来ている未来は、すっかり待ちくたびれていた。

「全く、地球人つてのは良く解んないよ。どうして服を選ぶだけでこんなに時間掛かるのかしら？ あんなの、気に入った物を適当に買えば良いのに」

と、待合室で独り言を言う未来。

「それはまるで自分が宇宙人だとも言ってるみたいな口振りだな」
そう言ったのは、知らない男の人だった。

体格から見て、大学生だろうか。

未来は取り敢えず、その男に挨拶した。

すると男は、

「君可愛いね。」

俺は溝口^{みぞぐち} 猛。君は？」

「獅子山 未来」

「へえ、未来ちゃんって言っただ？可愛い名前だね」

そのナンパムードを漂わす男に、未来はこう思った。

（何だこの男？この私にナンパか？）

「ねえお兄さん、私の事ナンパしようとしてるでしょ？」

「なっ、失敬な！」

と、頬を赤くする猛。

（何でバレたんだ？）

（そら来た）

「良いよ、私で良ければ付き合っただけでも」

「えっ、本当に？」

「良いよ。どうせ暇だし」

「それじゃあ行こう」 と、手を差し出す。

「何処に？」

「デートって言ったら遊園地に決まってるだろ」

（え、そうなの？今度レオでも誘ってみるかな？）

「そうと決まったら早いところ行こうぜ」

「うん」

と、二人は休憩室を去って行った。

その様子を、優香が目撃した。

（あれって、猛だよな？それに一緒にいるのはまさか？）

そのまさかであった。

（で、でも何で猛が未来さんと？もしかして二股っ！？）

と、優香は額にム力付きマークを浮かべた。

東京デゼニールランド。此処は、マッキーマウスで有名なオワルトデゼニールの名から取られ、ショーやパレードなどにもマッキーマウスキャラが出る有名なレジャー施設である。

未来と猛は、そのデゼニールランドに来ていた。

「へえ、此処が噂のデゼニールランドかあ」

そう言ったのは、やはり未来だ。

「えっ、未来ちゃん来た事無いの？俺なんか友人としょっちゅう来てるよ」

その友人とは勿論、陰で二人を監視している優香の事である。

「ん？」

後ろから鋭い視線を感じた未来は、振り替えて茂みを見つめた。

ドクンツ、ドクンツ！ 優香の心臓が高鳴る。

（お願いっ、気付かないで！）

「未来ちゃん、植木なんか睨んでどうしたの？」

「えっ、えっ、なっ、何でも無い」

未来は慌てて言った。

「それより猛さん、早く何か乗りましようよ?」

「そうだな」

と、去って行く二人。

途中、未来は後ろを気にした。

(嫌な予感がするわ)

「あつ、ホラーズマンションだって。あれ入ってみない?」

と、未来は正面の建造物を指差した。

「あれお化け屋敷だよ?」

「作り物のお化けなんか怖くないわ。さ、行きましょ」

と、猛を引つ張って建造物に入る未来。

「ちよつ、ちよつと未来ちゃんっ!」

(言えねえ!言えねえよ!俺がお化け嫌いだなんて口が裂けても言えねえよ!)

(ふうん、お化け嫌いなんだ?どんな顔するか楽しみね)

「ひやあああああ!」

猛の悲鳴と言う叫びが外に漏れた。

二人は建造物から出ると、

「ああ楽しかった」

と、未来が言った。

しかし、それとは裏腹に、顔色を真っ青にしたのがいる。

それは勿論、猛だ。

猛はお化けが大の苦手なのだ。

「猛さん、どうかしたんですか?」

と、未来は心配そうな顔で見つめた。

「ごめん、ちよつと気分悪くなっただけ。直ぐに戻るさ」

「隠さなくて良いのに・・・」

ギクツ！ 猛は驚いた。

「な、何をだい？」

「お化け嫌い。それに、私にだって嫌いなものくらいあるわ」

「な、お化けなんか怖く無いぞ！」

猛は見栄を張った。

その仕草に未来はクスクスと笑った。

「な、何が可らしいんだい？」

「だって猛さん、中身と外見が全然違うんだもん。可笑しいったら

ありゃしない」

その二人の様子を、優香は離れた所で監視していた。

(未来さん、楽しそうにしちゃって)

「猛の奴、絶対許さないんだから！」

怒った優香は、突然叫んだ。

すると、優香の体から紫色の光りが現れ、それが彼女を包み込んだ。
だ。

観覧者乗り場。未来達はそこにやって来た。

この観覧者は、天辺てんぺんに着いた時、そこで一緒に乗った相手に告白すると必ず結ばれると言う噂のある有名な乗り物である。

「よしっ、これに乗って未来ちゃんを俺の物に！」

その言葉に未来は、

「えっ、私がどうかしました？」

どうやら聞こえなかったらしい。

猛はホツとして胸を撫で下ろした。

「猛さん、乗りますよ？」

「あ、待って」

猛は急いだ。

ガシャンッ！ 二人が乗った観覧者の扉が係員によってロックが掛けられた。

そして数分が経ち、二人は天辺に差し掛かった。

「未来ちゃん」

と、猛。

未来は猛に振り向いた。

「何ですか？」

「あ、あの、その、俺、貴方が好きです！初めて会った時から、貴方に好意を抱いてました！付き合ってください！」

その言葉に未来は、

「あの、私宇宙人だけど、それでも良いかしら？」

「構いませんっ、貴方が何者であろうと俺は！」

「貴方が私を好きだと言う思いは充分解ったわ。良いわ、付き合っ
てあげる」

「よっしゃあ！」

猛がガッツポーズ取ったその時、後方の箱から紫色のオーラを放った優香が睨み付けているのが見えた。

「げっ、優香っ！？」

猛は思わず口にした。

「えっ、優香さん？」

未来は思わず後ろを振り返った。

（優香さん来てたんだ？でも何か様子が・・・）

と、その時、優香の体から太い尻尾が生えた。

「嘘でしょっ！？」

未来は目を疑った。

しかし、そのせいでは無かった。本当に生えているのだ。

（あの子怪獣の子だったのっ！？ってまずいよこのままじゃあ！）
そんな事を考えている内に、優香の体は段々と怪獣のそれに
変化して行った。

その姿はまるで、ゴラの様だ。

ゴメス　それが怪獣の名だ。

「ゆっ、優香っ！？どうなってるんだありゃあっ！？」

と、その時、ゴメスは巨大化し、観覧者を破壊した。

二人の乗った観覧者は、みるみる内に真っ逆さま。地面に墜落して破壊された。

「ギャオーッ！」

怪獣は叫ぶと、口から炎を吐いた。

「逃げるよっ！」

と、未来は猛を担いで逃げ出した。

ドカーンッ！　地面は爆発。巨大なクレーターを作り上げた。

未来達はその爆風で数メートル程吹っ飛ばされた。

「優香が怪獣になるなんて一体どうなってるんだよっ！？俺は夢でも見てんのかっ！？」

「いいえ、夢じゃないわ。現実よ」

「そんな証拠、どこにある？」

「言ったでしょ？私は宇宙人だって。だから、彼女が怪獣になっても不思議は無いのよ」

と、その時、再び炎が飛来した。

「猛さんっ、安全な場所へ！」

「君はどうするんだよっ！？」

「私はあの子を止める！」

そう言っつて未来は駆け出した。

「止めるって一体どうやってっ！？」

しかし、その声はもう届かなかった。

未来はゴメスの近くへ来ると、

「やめて優香さん！」

しかし、ゴメスは聞く耳持たず。猛目掛けて炎を吐いた。

(このままでは猛さんが！)
未来はキャツスイに変身して巨大化。

猛の下に炎が迫って来た。

もう駄目だ！ 猛がそう思った時、彼の目の前にキャツスイが現れ、灼熱の炎を背中で受け止めた。

「うっ！」

キャツスイは背中に火傷を負った。

「俺を、助けてくれるのか？」

その問いにキャツスイは頷き、立ち上がってゴメスの方を向いた。

「優香さん、落ち着いて？」

と、キャツスイ。

しかしゴメスは、

「私の邪魔をしないで！」

と、灼熱の炎を吐いた。

キャツスイはそれを、手で弾き飛ばした。

「優香さん、何があなたをそうしたの？」

「猛よ！」

「えっ？」

「猛はね、私の彼氏なのよ！？それなのに猛、あなたを好きになった。私はそれが許せなかったの！」

キャツスイ、隠しててごめんない。私、怪獣なのよ！」

ゴメスはそう言つて、キャツスイに襲い掛かった。

「私が怪獣である以上、あなたは私と戦わざるを得ないわ！」

ボグッ！ ゴメスはキャツスイを殴り飛ばした。

吹っ飛んだキャツスイは、逃げる猛の上すれすれを通り過ぎ、その前に落下した。

「うわああああ！」

驚いて慌てて逆方向へ逃げる猛。

が、その先にはゴメスがいた。

ゴメスは猛を見付けると、その大きな体を降ろし、猛を掴み取った。

「ギャオーッ！」

ゴメスは猛に向かって雄叫びをあげた。

猛は恐怖に全身がビクビクと震え、小便をちびらせてしまった。

「こ、恐い。俺、もう駄目」

と、気絶する猛。

ゴメスは口を大きく開け、猛を人指し指と親指に持ち変え、口に近付けた。

「駄目！」

と、光弾が飛来。ゴメスの腕をぶった切り、吹っ飛ばした。

猛の体はその反動でキャツスイの方へ吹っ飛んだ。

キャツスイは潰さない様にキャツチ。地面に降ろした。

「優香さんっ、何て事するのっ!？」

「優香？それはさっきまでの私。今は怪獣のゴメスよ。人間を食おうが殺そうが私の自由じゃなくて？」

(くっ・・・優香さん、身も心も怪獣になってる!どうすればっ!?)

と、思考を巡らすキャツスイ。

ゴメスはその隙に灼熱の炎を吐いた。

「きゃあっ!」

キャツスイの体を炎が包んで燃え上がる。

「暑いつ、死ぬ!」

と、キャツスイは辺りを見回した。

すると、デゼニールランドから少し離れた場所に海を見付けた。

キャツスイは慌ててその海に飛び込み、体を包む炎を鎮火させる。

ゴメスはその隙に腕を再生した。

(再生能力?)

そうかつ、あの子の怪我の治りが早かったのはこれだったのね!)

と、納得するキャツスイ。

「死ねえ猛！」

と、猛に向かって炎を吐くゴメス。

「猛さんっ!？」

キャツスイは目にも留まらぬスピードで猛の下へ行き、盾となった。

「うわあああっ!」

背中を受け止めたキャツスイは、あまりの痛さに悲鳴をあげた。それにより、背中への火傷が悪化した。

「フツ、そんなるくでなしの為に体を張る。あなたって本当にバカね」

「私は、災害によって人が死ぬのだけは見たく無い!この気持が卑怯で最低で下劣な怪獣のあなたに解るかしら?」

ブチッ! 堪忍袋の緒が切れたゴメスは、キャツスイに火炎放射

キャツスイはそれを背中で受け止める。

(熱い、痛い)

「フツ、そのまま力尽きてしまえば良いわ!」

ゴメスがそう言った瞬間、キャツスイのカラータイマーが鳴り、赤く点滅を始めた。

(うっ、もう、限・・・界・・・)

と、意識が薄れそうになった。

だがキャツスイは、頑張って意識を保った。

(私が死んだら、誰が猛さんを護るの?)

と、その時、ゴメスに向かってメビウムシールドが飛んで来た。メビウムシールドはゴメスに当たると、小爆発を起こした。

「きゃあっ!」

ゴメスは悲鳴をあげつつ吹っ飛んだ。

「キャツスイさん、大丈夫ですか?」

そう言ったのは、メビウスだ。

その瞬間、キャツスイの怒りが爆発しそうになった。

しかし、彼女はそれを、無理矢理抑え付けた。

「メビウス、何故助けた？」

「君は体を張って彼を護った」

と、猛をチラツと見るメビウス。

「僕はそんな君が殺られ続けているのを見ていられなかった。それにお互い、地球を守るって言うのは同じじゃないか。僕はそんな人を見捨てられない！」

「フツ、お前面白い奴だな。この借りは何れ返す。その時まで勝負はお預けよ」

キャツスイはそう言うのと立ち上がった。

「ゴメスツ、今まで友達だと思ってた。けどもう絶交よ！」

「フツ、こっちはあんたの事なんか最初から友達だなんて思って無いわよ。全てはあんたを倒す為のデータ集めにしかすぎない」

「最っ低・・・」

と、低い声を出すキャツスイ。

「何とでも言いなさい。お前は此处で死ぬのだから」

「うわああああっ！」

キャツスイは雄叫びをあげて駆け出した。

「でいやあ！」

キャツスイは地面を蹴って飛び上がり、空中で前転するとキャツスイキックを放った。

キャツスイの左足が赤く燃え上がる。

ドカーンッ！ キャツスイキックを喰らったゴメスは木っ端微塵。

跡形も無く消え去った。

「でいやあ！」

キャツスイは地面を蹴り、飛び去って行った。

「猛さん、猛さん」

と、未来の呼び掛けに、猛は目を覚ました。

「こ、此処は？」

猛は初めて見る風景に、そう聞く。

「遊園地の医務室よ。猛さん、お化け屋敷で悲鳴あげて気絶するか
ら驚いちゃったわ」

「えっ、お化け屋敷で気絶？俺が？」

「そうよ、覚えて無い？」

「ちよつと待て。俺は確か怪獣に・・・」

「何言ってるんですか？怪獣なんて出てないですよ」

「じゃあ君が宇宙人って言うのは？」

「何ですかそれ？私は地球人よ？」

おかしい そんな顔をする猛に、未来はクスクスと笑った。

（実は全部ホントなんだけど、男が怪獣見ただけで気絶なんて恥ずかしいから、全部猛さんの夢って事にしちゃったのよね）

「未来ちゃん、何で笑ってんの？」

「えっ、わ、笑ってないよ？」

「否、笑ってたね」

「笑ってません」

「嘘は嫌いだ。本当の事言え！」

と、未来の脇の下をくすぐる猛。

未来はあまりにも撥ったくて笑い泣きしてしまった。

「たたたた猛さん、やや、やめてっ、撥っ、たいから！」

STORY 6 優香、怪獣になる(後書き)

優香死にました。

STORY 7 ジュダの怒り、ゼットン出現！

その日、未来は自宅のリビングにあるソファに、座って寛いでいた。

「猛さん、早く来てくれないかな？」

と、独り言を言う未来。

「はああ」

未来は溜め息を吐き、横になった。

ピンポン インターフォンが鳴った。

未来は起き上がると、慌てて玄関に向かった。

ガチャ 未来は扉を開ける。

すると、小さい段ボール箱を持った見知らぬ男が立っていた。

「どなた？」

「宇宙配達です。獅子山様にお荷物が届いております」

男はそう言って、未来に段ボール箱を渡した。

未来はそれを受けると、受取人証明書に捺印した。

配達員は挨拶をすると、去って行った。

(何だろう?)

未来は部屋に戻り、段ボール箱を開封。

すると、中に携帯電話が入っていた。

「何で携帯が？」

未来はその電話を取ると、電源入れた。

それと同時に、携帯が呼び出しをした。

未来は通話を押し、耳に当てた。

「私だ」

その声は、ジュダのモノだった。

「ジュツ、ジュダ様!？」

未来は驚き、思わず口にした。

「キヤッスイか。どうやら私の送った携帯は届いた様だな。丁度良

い、お前に話しがある」

「は、話し、ですか？」

「キヤツスイ、地球征服の方はどうなっている？」

「ジユ、ジユダ様？その件に関しては何もう少しお待ちを」

「フツ、貴様は私を怒らせたのか？」

「はい？」

「私は知っているぞ？お前は地球で暴れ回っている怪獣達を倒しまくっているそうだな。」

そして、地球を征服しにやって来る宇宙人達も・・・」

ゴクツ！ 未来は唾を飲んだ。

「貴様つ、何故さつさと地球を征服しないっ！？貴様を地球に向かわせたのは征服わせる為だぞっ！？それとも貴様はこの私に盾突こうと言うのかっ！？」

キヤツスイ、貴様がウルトラ戦士に襲われて死に掛けていた所を助けてやったと言う恩を忘れたのではあるまいな？」

「はい、それはもう、ジユダ様にはとても感謝しています。だから私は、ジユダ様に忠誠を誓おうと」

「言い訳は沢山だ！貴様には征服する気が無いのだろうっ！？それでも構わん！困るのは貴様だからな！」

ブツツ！ 電話は切られてしまった。

（ジユダ様、私にはこの美しい地球を征服する事が出来ません。一体どうすれば？）

未来は、ジユダの顔を思い浮かべながら、心中でそう思った。

その頃、渋谷廃墟には、ゼットンが出没していた。

このゼットンは、ウルトラマンを倒した事のある最強の宇宙怪獣の別個体である。

「ウルトラマンキヤツスイ、抹殺する」

ゼットンはそう口にする、未来がいる町の方へ向かった。

STORY 7 ジュダの怒り、ゼットン出現！（後書き）

いよいよジュダ編もクライマックス。

キャツスイはゼットンを退ける事が出来るのかっ！？

STORY 8 宇宙怪獣ゼットン

渋谷に出没したゼットンは、町の方へ向かった。人々は未だそれを知らない。

だが、その危機に逸早く察知した人物がいた。

その人物は、ウルトラマンメビウスこと日々野^{ヒビノ} 未来だ。

未来は、渋谷方面に向かった。

午後1時、獅子山家リビング。

未来は、部屋の隅で小さくなっていた。

（どうしよう？あのお方を怒らせてしまった。あのお方は必ず何かしてくる。ああどうしようどうしようっ！？）

と、思いに更ける未来。

（そうだ、いつその事、ジユダ様をこの手で・・・）

未来は自分の手を一旦見つめ、首を横に振った。

（ダメよそんな事。いくらなんでも・・・。何か、何か他に方法がある筈！）

と、その時、未来を地震が襲った。

（じ、地震？）

未来は慌ててテーブルの下に隠れた。

やがて、地震は収まり、未来はテーブルの下から出た。

（今の地震、結構凄かったわ。何か不吉な予感がする）

と、未来は外出の支度をした。

未来は、渋谷付近に来ていた。

（おかしい。この辺から異様な気配を感じたのに、何も無いなんて・・・）

と、未来は辺りを見回す。

と、その時、未来の頭に声が響いた。

「メビウス、地球にゼットンが現れた。大至急逃げるんだ！」

その声は、ウルトラマンのそれだった。

「ウルトラマン兄さん、ゼットンってマケット怪獣の？」

「その別の別個体だ。調べた所、そいつは私より上だ。お前では到底敵わない相手だ。」

「うわあっ！」

ウルトラマンは突然悲鳴をあげ、通信を遮断した。

「兄さんっ!？」

しかし、声は返って来なかった。

その頃、未来は直感を頼りに、上野にやって来た。

そこでは、宇宙怪獣のゼットンが暴れていた。

光線を放ち、建造物を破壊するゼットン。

「あれはっ!？」

未来はゼットンを見つめた。

(何だ? あんな奴、見た事も無い)

「つて、こんな事してる場合じゃない！」

と、未来はキャツスイに変身。巨大化してゼットンに襲い掛かった。

「でいやあー！」

キャツスイの飛び蹴りがゼットンに炸裂。

ゼットンは数メートル程吹っ飛び、マンションに激突して破壊した。

「ゼットン」

ゼットンは直ぐに立ち上がり、キャツスイに光線を放った。

パーンッ! キャツスイの胸に当たった光線は火花を散らし、彼女を後ろへ転ばせた。

「ふっ！」

キャツスイは素早く立ち上がり、地面を蹴って飛び上がってゼットンの背後を取った。

「はあっ！」

ゼットンの背中にストレートパンチを叩き込むキャツスイ。

ズボッ！　ゼットンの背中に風穴が開いた。

「ゼットーン」

ドカーンッ！　ゼットンは呆気無く木っ端微塵。粉々に碎け散った。

「あら、案外弱いのか？」

キャツスイはそう口にし、飛び去ろうとしたが、予想外の展開がそれを引き止めた。

なんと、粉々になったゼットンの欠片が、一つにまとまって元の姿に戻ってしまったのだ。

「ぬあっ!？」

キャツスイは驚き、目を疑った。

「そんなバカな事が有り得るかっ!？」

「ゼットーン」

ゼットンはそう言うと、胸にXマークを表した。

「我が名はゼットンX。ジユダ様の忠実なシモベ。ジユダ様の御命令により、ウルトラマンキャツスイを抹殺しに来た」

「えっ?」

「ウルトラマンキャツスイ。お前の命は無い。此処、お前の墓場」

ゼットンXはそう言うと、一瞬でキャツスイの背後に移動し、彼女を殴り飛ばした。

「うっ！」

背中に激痛が走ったキャツスイは、数メートル程吹っ飛んだ。

ドカ、ズサーッ！　地面を削り、溝を作るキャツスイ。

(つつ、強い。今の私じゃ、敵いっこ無い……)

キャツスイは蹠踉めきながら立ち上がる。

「お前、私には勝てない」

ゼットンXはそう言い、キャツスイのカラータイマー目掛けて光線を放った。

（もう私、本当に終りね）

キャツスイは死を覚悟した。

（ジユダ様、言いつけ破つて、申し訳ありません・・・）

と、その時、目の前に赤い炎が現れ、その中からレオが現れた。

パーンッ！ レオの体に当たった光線が火花を散らす。

「無事か？」

「レオ？」

「キャツスイ、俺を助けてくれた時の威勢はどうしたんだ？」

「えっ？」

「お前はまだ、本気を出していないだろ」

「フツ、私の本気を出して無いって？」

「良いわ、全力で殺つてやるわ」

と、キャツスイは地面を蹴り、ゼットンXに飛び掛かった。

ゼットンXは慌てて回避。カウンターを決めた。

「うわっ！」

宙を舞うキャツスイ。

ゼットンXはそのキャツスイに、光線を放った。

パーンッ！ 火花が散り、キャツスイは墜落した。

すると、カラータイマーが高鳴り、点滅を開始した。

「くっ・・・こんな所で、殺られてたまるかっ！」

キャツスイは立ち上がり、ゼットンXに突撃した。

「ふんっ！」

キャツスイはゼットンXを押し倒し、乗し掛かった。

「さつきはよくもやってくれたわね！」

と、ゼットンXをバシバシ殴りまくるキャツスイ。最早ウルトラマンとは呼べない。

「お前なんか殴り殺してやる！」

「無理だ。お前には出来ない」

ゼットンXはそう言って、体を横へ回転。キャツスイとの立場を逆転させた。

(しまった!)

と、焦るキャツスイ。

「形勢逆転だな」

ボグツ！ ゼットンXはキャツスイの顔面を殴りつけた。

「・・・痛いわね。」

てかレオ、見てないでなんとかしなさいよっ!？」

と、キャツスイはレオの方を見る。

が、しかし、レオの姿は何処にも無かった。

(えっ、どう言う事? さっきそこにいたじゃん?)

「フツ、レオなんか何処にもいないじゃないか。体力の限界で幻覚でも見たか?」

(幻覚?)

「そんなバカな事ある筈が!」

「何だか分からないが、お前はもう終りだ」

ゼットンXはそう言って光線を放った。

ドカーンッ！ ゼットンXの光線が巨大なクレーターを作り上げ、
砂埃を巻きあげた。

「フツ、どうやら消滅した様だな」

と、その時、ゼットンXの背後に、カラータイマーの音と共にキャツスイが現れた。

「何っ!？」

ゼットンXは慌てて振り向いた。

「貴様、死んだのでは無いのかっ!？」

しかし、キャツスイはその問いに答えず、ゼットンXに回し蹴りを放った。

ゼットンXは勢い良く吹っ飛び、墜落すると地面を転がった。

「きっ、キサマアアッ!」

ゼットンXは素早く立ち上がり、キャツスイに体当たりをした。しかし、ゼットンXはキャツスイの体を通り抜けてしまった。

「なっ、何だっ、何が起こったんだっ!?!」

「あんたが知る必要は無いわ」

キャツスイはそう言い、地面を蹴って飛び上がった。

「やあっ!」

キャツスイは空中で回転してキャツスイキックを放った。

赤く燃え上がった左足がゼットンXを襲う。

ドカーンッ! キャツスイキックを喰らったゼットンXは木っ端

微塵。跡形も無く消え去った。

キャツスイは、地面を蹴って飛び去って行った。

.....

あのレオは、一体何だったのか、未だに謎である。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6346b/>

ウルトラマンキャスィ

2010年11月11日07時13分発行